



TITLE:

ヒトの前有孔質及びその附近の細胞構築学的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

瀧本, 保

CITATION:

瀧本, 保. ヒトの前有孔質及びその附近の細胞構築学的研究. 京都大学, 1959, 医学博士

ISSUE DATE:

1959-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210671>

RIGHT:

氏 名	瀧 本 保 たき もと たもつ
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 1 6 号
学位授与の日付	昭 和 34 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 生 理 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	ヒトの前有孔質及びその附近の細胞構築学的研究 (主 査)
論 文 調 査 委 員	教 授 堀井五十雄 教 授 西村 秀雄 教 授 大谷 卓造

論 文 内 容 の 要 旨

前有孔質およびその隣接脳部に関する研究は、すでに多数にのぼるが、いまだふじゅうぶんな点も少なくないので、著者は邦人を材料として、梁下野、嗅三角、内側嗅回、終板旁回、対角帯、前有孔質、外側嗅回および中隔側座核等を含めた脳部の細胞構築学的研究を行ない、次のごとき所見を得た。

1. 梁下野には腹側部、中間部、背側部および最背側部が区別される。腹側部は直回に類似の構造を示すが、中間部、背側部へ移行するにしたがいⅡ層の発育がよくなり、Ⅲ層、Ⅳ層およびⅤ層の発育が悪くなる。最背側部ではⅢ層およびⅣ層が全く消失する。特に最背側部の前方では帯状層（Ⅰ層）内に中隔側座核に見られる第2群の小集団が認められ、後方ではその腹外側部の帯状層の表層に細胞の全く乏しい亜層および小細胞の密集する薄い亜層が認められるが、これらはいまだ何人によっても記載されていない。

2. 嗅三角および内側嗅回は先人の所見とは異なり、梁下野の背側部に類似の構造を示す。

3. 終板旁回および対角帯は表層の比較的厚い帯状層および深層の細胞層に区別される。帯状層の中部より後方では梁下野最背側部の腹外側部におけるほぼ同様の亜層が認められる。細胞層は帯状層に比して細胞が大きく密で、その間にレンズ核ワナ核の細胞が混在する。

4. 中隔側座核、被殻およびその付近には各種の細胞集団、すなわち中隔側座核それ自身の中等大の細胞よりなる細胞群、被殻の大細胞より生ずると思われる細胞群およびレンズ核ワナ核に属する濃染したきわめて大きい細胞よりなる集団のほか、きわめて小さい細胞よりなる第1群、それよりやや大きい細胞よりなる第2群、中等大の細胞よりなる第3群等が現われるが、著者ははじめてこれらを区別し、詳細に記載した。これらの各集団はきわめて複雑な変化を示し、ときには相互間の区別が困難で、互いに混合または錯綜する。

5. 前有孔質は表面が複雑な凹凸を示し、表層の帯状層と深層の細胞層に区別される。帯状層は一般に薄く、対角帯に比し各亜層の区別が困難であり、細胞層には前述の第1群、第2群、第3群、レンズ核ワナ核等の細胞集団がある。著者は帯状層および細胞層の態度により、はじめて前有孔質に内側部、中間部

および外側部を区別した。内側部では帯状層がきわめて薄く、第1群、第2群等の細胞集団が脳表面にきわめて近く位置する。中間部では帯状層がやや明瞭で、細胞集団は内側部におけるよりも深部に位置する。外側部では表面が粗大な起伏を示し、帯状層では各亜層が前有孔質のうちで最も明瞭であり、細胞層では細胞集団の形成が不著明である。

6. 外側嗅回は表面が平坦で、これに著者の3亜層よりなる帯状層および2層よりなる細胞層が区別され、これらの態度により、さらに前頭部、島部および側頭部に分けられる。前頭部では帯状層の各亜層の区別がやや明瞭で、その深部に外側嗅条を含み、細胞層では小錐体形細胞よりなる層および前障から分離した細胞集団（第2群）を含む層が区別される。島部では帯状層の各亜層が明瞭で、細胞層では断続的な層および一様な構造の層が認められる。側頭部では帯状層の各亜層がきわめて明瞭で、細胞層では島部における断続的な層が次第に明瞭となり、その細胞が集まって特有な細胞集積をつくる傾向がある。

これを要するに前有孔質およびその隣接脳部の細胞構築像はきわめて複雑であるが、それぞれ全く独立的な構造を示すものではなく、それら相互間においてかなりの共通性を認めることができる。

論文審査の結果の要旨

ヒトの前有孔質を中心として嗅覚に関係ありとせられ、従来不明の点の少なかった梁下野、嗅三角、内側嗅回、終板旁回、対角帯、前有孔質、外側嗅回、中隔側座核等について主として細胞構築学的研究を行ない、従来の報告を訂正すべき種々の新知見を得た。「前有孔質およびその隣接脳部の細胞構築像はきわめて複雑であるが、それぞれ全く独立的な構造を示すものではなく、それら相互間においてかなりの共通性を認めることができる」というのが著者結論の要点である。本論文は、従来不明の点が多かった難解なヒト嗅脳の構造に関して幾多の新知見をもたらし、かつ総括的な見解を表明したものである。したがって、本論文は医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。

〔主論文公表誌〕

京都大学医学部解剖学教室第1講座論文集 第23報（昭.33）

〔参 考 論 文〕

1. 重複下大静脈の2例

（吉田正美ほか2名と共著）

公表誌 解剖学雑誌 第34巻（昭.34）第6号

2. サルの上丘オリブ核について

（吉田正美ほか2名と共著）

公表誌 京都大学医学部解剖学教室第1講座論文集 第33報（昭.34）